1

Track4：女性アスリートの膣圧で早漏肯定レッスン

「……あなたも髪を乾かしにきたの？
ドライヤー使う？」

「それとも……ベッドで待っていられなかった？」

「珍しいわね。
そんなにあなたのほうから、したがるなんて……」

「私のお尻におちんちんを擦りつけて、
何をしたいの……？」

「黙っていたら、わからないわ。
おちんちんをどうしたいの？」

「……必死になって、
おちんちんを押しつけてくるの、かわいい」

「あなたは、後ろからするのが好きだものね」

「……立ったまま、する？」

「最近、私が上になってばかりだったから、
あなたも自由に動きたいわよね」

「正直に言うと、すごく申し訳ないと思っているの」

「私のせいで、あなたの男性としての自信を
奪ってしまってるみたいで……」

「あなたは、おちんちんを挿れている時、
よく私の締まりがすごいって、褒めてくれるけれど……」

「その……ほとんど動けずに、
出ちゃうことが多い……じゃない？」

「私は、それが嬉しいからいいのよ？
でもあなたは……いつも、しょんぼりしているから……」

「アスリートとして、私が身体を鍛えれば鍛えるほど、
あなたは、せっくすを楽しめなくなって
いるんじゃないかって心配で……」

「前に、学生の頃とは比べ物にならないぐらい
すごいって言っていたけれど、そんなに違うものなの……？」

「そういうのって、自分ではわからないものだから……」

「……あなたの身体で教えてくれる？」

「実際に教えてほしい。
私の身体が、どんな感じにすごいのか……」

「ふふっ。一生懸命、おちんちんを
押し付けて息を乱してるあなたが、かわいくて堪らない……」

「あなたは自分から挿れる時、いつも後ろからしたがるけれど、
男の人は、みんなそうなのかしら……」

「それに、他の体勢でする時より、ほんの少し乱暴になるの……
腰の振り方も荒々しくて……」

「あ……おちんちんが元気すぎて、
上手く入らない？　私が挿れる？」

「お腹にびったり張りついて、
角度を合わせるのが大変そうだもの」

「最近は、私が上になって挿れてあげてばかりいたから、
上手くできなくて当然……」

「少し、腰の位置を下げてくれる？」

「情けないなんて思っていないわ。
それより、こういう時ぐらい年上の私にリードさせてほしい」

「私がそうしたい……
あなたを、もっともっとダメにしたいの……」

「私、知っているわ。あなたって、私が手を使わずに
おちんちんを挿れてあげると、すごく興奮するって……」

「後ろからでも平気……今まで数えきれないぐらい、
あなたのおちんちんを挿れてきたもの……」

「ん……こうやって……
少し上から、私のを被せてあげれば……」

「ほら、入っていくわ……ああ、でもいつもより大きい……」

「んあっ！？　やっ、挿れてる途中で
動いたらっ……はあっ、それがいいの？
自分で腰を振って、パンパンしたかった？」

「いいわ、乱暴にして？　いっぱいおちんちんで突いて、
自信を取り戻して？」

「もっと、激しくしてほしいっ……
お腹の奥を掻き回すようにっ……
あああっ、それっ……そこっ……」

「……え？　あっ……
あっ、ああっ、おちんちんから出てるっ……
出ちゃってるっ……」

「気持ちいい？
おまんこの中で、びゅーびゅーするの好き？」

「はぁっ……私も好き……
あなたのおちんちんで、びゅーびゅーされるの……
もっと出してっ……おちんちんの先をっ……
奥に押しつけながらっ……」

「あぁ、熱い……勢いがすごくてっ……
無理やり……妊娠させられてるみたい……」

「……子宮が、あなたの出した熱いので
溺れそうになってる」

「現役のマラソン選手を妊娠させようなんて、
悪いパートナーさんね……」

「あっあ、ああっ……ごめんなさいっ、
おちんちんっ、外に飛び出してっ……」

「……意識はしていないのだけど、
あなたが気持ちよくなってくれると、私も興奮して……
勝手に、あなたのおちんちんを、
ぎゅぅって押し出しちゃうみたい……」

「これは学生の頃からずっとね……」

「……もっとおちんちん、
ぎゅうぅってしてもいい？」

「今度は、私が動く番……
あなたのかわいい声が聴きたくなったの……」

「また、今ので自信を失わせて
しまったかもしれないけれど……」

「今まで何度も言っている通り、
私は、あなたのすぐ出ちゃうおちんちんが、
愛おしくて仕方ないの……」

「だから、自信を持ってほしい。
あなたのおちんちんで、
私はたくさんの幸せをもらってる……」

「早いおちんちんのままでいいのよ？
私が出してほしい時に出してくれる、
素直でかわいいおちんちんのままでいて？」

「元気にお返事できる？
お返事の仕方……わかるわよね？」

「ふふっ、そう。上手上手……
私のためにいっぱい出してくれて嬉しい……」

「いいのよ。おちんちんは、びゅーびゅーしたままで……
床はあとで掃除しておくわ」

「気持ちいいのが終わらなくて、頭がおかしくなりそう？」

「……でも、まだ終わらせない。
あなたの心が我慢するのを諦めちゃうまで、
せっくすする……」

「ふふっ、かわいい。そうやって、あなたはベッドの上で、
大人しく待ってればいいの」

「ちゅっ、ちゅっ……ん、ちゅぅ……はぁ、バンザイして？
ん、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっちゅっちゅっ……」

「手錠なんてする必要なかったわね。
あなたは、こうやって両腕を押さえつければ、
じっとしていてくれるもの……」

「舌を出して？」

「ん、ぢゅっ、ぢゅうぅぅっ、ぢゅっ……
ぢゅっぽ……ぢゅぽっ、ぢゅぽっ、ぢゅっ、
ぢゅうぅぅっ、ぢゅっ、ぢゅうぅっ……！」

「ん、はあっ……わかる？
今から、あなたのおちんちんに同じことをするの……」

「もう一回、舌……ん、ぢゅうぅっ……
ぢゅっ、ぢゅるるっ……ぢゅぅぅ、ぢゅるるっ、
ぢゅうぅ、ぽっ……」

「ぢゅっぢゅっぢゅっぢゅっぢゅっぢゅっ、
ぢゅぅぅっ、ぢゅるっ、ぢゅうぅぅっ……！」

「ぢゅっ、ぽっ……はあっ……
まだ挿れてないのに、おちんちんが暴れてる……
これから気持ちいいことをされるんだって、
わかってるのね……」

「恥ずかしがらずに、私を見て？
おちんちんを挿れる時は、必ず、私の目を見てほしい……」

「こうして腕を押さえつけてると、
どんどん、あなたの瞳が潤んでくるの……」

「あなたは、今から私に大切なものを奪われてしまうのよ？」

「自分の意思とは関係なく、
おちんちんを気持ちよくさせられて、
男性としての尊厳を失っていくの……」

「でも、すぐにこう考えるようになる」

「気持ちいいから、いいや……って。
女の子みたいな声を出しながら……」

「あなたとせっくすしているうちに、気づいたことがあるの」

「どんなに真面目な性格の人でも、
おちんちんに気持ちいいことを教え続けたら、
心が壊れちゃうんだって……」

「……こうやって、先っぽを入り口に
擦り付けてるだけで出ちゃいそうになる？
おちんちん、待ちきれない？」

「私も待ちきれない……
あなたのおちんちんが、挿れてすぐ、
我慢できずにお漏らししちゃうのを……」

「くす、初めて抵抗したわね……
でも身を捩っただけ？
バンザイしたままでいいの？」

「男性のあなたがこんな風に押さえ込まれて、
一方的におちんちんを使われちゃうなんて……
受け入れるの大変だったわよね」

「今、挿れてあげる……また、舌を出して？」

「もっと、突き出すように……
さっきのように、舌をおしゃぶりしてほしいのでしょう？」

「ふふっ、すごくだらしない顔してる……
かわいい……本当にかわいい……」

「でも、こうしたら……もっとだらしない顔になるかしら……」

「ん……あぁ、出ちゃった……
おちんちん、もう終わっちゃったのね……
挿れて5秒も経っていないのに……」

「舌は引っ込めちゃダメ……だらしない顔のままでいて？」

「あなたのそんな顔を見られるのは、
私だけ……誰にも教えたくない……」

「ん、ぢゅっ、ぢゅうぅ……ぢゅっ、ぢゅるっ、
ぢゅぅぅっ……ぢゅっ、ぢゅぽっ、ぢゅっ、
ぢゅうぅぅぽっ……」

「女の子にお持ち帰りなんてされたら、
無理やり、赤ちゃんを作らされちゃう……
だから不安なの。お外に出したくないの……」

「ねえ……もうこのまま、
ずっと私のおまんこの中にいて？
あなたのおちんちん、閉じ込めておきたい」

「過保護だって言われてもいい。
あなたを独占したいの……」

「……ほら、女の子みたいな声を出してお返事は？」

「ふふっ、また出てる……
私のお腹の中、あなたが出したので溢れかえっているわ」
「妊娠するまで続ける？　私に赤ちゃんを産ませたい？」
「おちんちんから勢いよく出してるのに、
『子供を作るのはまだ早い』なんて、
どっちが本音なのかしら……？」
「あなたのおちんちんは、
こんなに赤ちゃんが欲しそうなのに……」
「もう、腕を押さえつける必要はなさそうね。
いい？　いつもみたいに動いて……」
「かわいい声、たくさん聴かせて……？」
「んっ、はあっ……これが、あなたが私に
したかったことでしょう？」
「激しく、パンパン音を鳴らして……
私に、あなたのおちんちんのすごさを
教えたかったのよね？」
「すごい大きな声が出てる……
あなたはこれ、好きだものね……」

「私も好き……あなたを無理やり犯してる感じが、
どうしようもなく興奮するの……」

「こんな私を知っているのは、あなただけ……
ううん、あなたが私をえっちな子にしたのよ……？」

「あなたもおちんちんも、かわいすぎてずるい……
何回もおちんちんから出してくれるあなたが、健気すぎて……」

「大好きで、愛おしいのに……そんなあなたを、メチャクチャに
したいって思ってしまうの……」

「こんな風に、脚を大きく開いてまたがるの、
すごく恥ずかしいけれど……」

「あなたになら、そんな私を見てほしい……
乱れた私も好きになってほしい……」

「あなたのおちんちんが、
出たり入ったりしてるところ、見える？」

「こういう時、運動をしていてよかったと思うの……」

「普通の女の子より、
長くあなたを悦ばせてあげられるし、
たくさんおちんちんから出してもらえる……」

「あなたはどう？
現役アスリートのカノジョとえっちするのは、
どんな気分？」

「……おちんちんが気持ちよすぎて、
それどころじゃないみたいね」

「そんな風に私の腰をつかんでも、
パンパンするのは止まらないわ……」

「見て？　もうお腹の中が、
あなたの出した精液で一杯になって、
どんどん逆流してきてる……」

「白く泡立ってるのが見える？
おちんちんが奥に入るたびに、精液が溢れ出して……」

「はぁっ、もっとパンパンしてほしい？
こう？　これがいいの？」

「最近、ようやく下の名前で
呼んでくれるようになったのに、余裕がなくなると、
まだ私を『先輩』って呼ぶのね……」

「そうやって、のけ反りながら射精するの、
すごく色っぽい……」

「そろそろ、おちんちん空になりそう？」

「……それとも、まだがんばれる？」

「私のために、がんばってくれる？」

「私は平気よ？　まだ全然、疲れてない。
もっと、激しくすることだってできるわ」

「ほら……ほらほらほらっ……
あなたが、後ろから私をこうしたかった
ように……」

「でも、あなたって本当にすごいわ。
今日は数えきれないぐらい、
おちんちんから出してるのに、
精液の濃さが変わらないの……」

「普通の男性は、
一度おちんちんから出したら、
それで満足しちゃうものなのでしょう？」

「なのに、あなたは……おちんちんの硬さも、
ガチガチのまま……
ずっと、私に興奮してくれてる……」

「それが、女にとって
どれだけ嬉しいことかわかる？」

「何度も何度もおちんちんから出してくれて、
それがすごくいじらしくて……」

「あなたは、いつもおちんちんから
すぐ出してしまって、
私が満足できてないって思っているみたい
だけれど……」

「……私は、あなたに膣内で出してもらってる時、
頭の中が真っ白になって、全身が痺れるぐらい、
気持ちいいの……」

「これって、きっと……イッてる、のよね？」

「ごめんなさい。
私、そういうのを口に出したりするの、
得意ではなくて、
あなたは分かりづらかったと思うけど……」

「こんな風に、おちんちんが奥に当たってる状態で
びゅーびゅーされると……」

「ああ、それっ……子宮の中に直接、
あなたのを注ぎ込まれてる感じがしてっ……」

「ふっく、んんっ！？　んっん、んんんっ！？」

「はあっ、もっと……出してっ、奥でっ……
いっぱい、びゅーびゅーしてっ……」

「ふあっ、んっんー！？　んんっんー！？
んんっん、んんんーーーっ！？」

「はぁ……あ……そうやって……子宮の入り口に、
おちんちんから勢いよく出されると……
あなたの赤ちゃんが欲しくて堪らなくなる……」

「すぐには無理だってわかってるのに……
あなたの赤ちゃんを産みたいって、
思ってしまうの……」

「ん……ちゅっ……ちゅっ、ちゅぅ……はぁ……
あなたにはわかってほしい……」

「あなたがおちんちんから出してくれれば、
それだけで私は、気持ちがいいし、
女の幸せを感じられる……」

「……動かないで。今、おちんちんを抜くわ」

「ん、んんっ……はぁ……そのまま、寝ていて？
おちんちん、綺麗にする……」

「ん……ぢゅ……ぢゅっ、ぢゅるるっ、ぢゅうぅ、
はあ、ぴちゃ、れろっ……ぢうぅぅっ、ぢゅっ、

ぢゅるるっ、ぢゅううっ……はぁ……」

「ぢゅうぅ、ん、ぢゅっ……はぁ、ぢゅっ、ぢゅるるっ、んぢゅ、ぢゅうぅ、ぢゅっ、ぢゅるるっ……」

「はぁ、まだ硬いままなのね……
あなたは、おちんちんの体力ありすぎだわ……」

「……ね？　すぐに出ちゃうおちんちんでも平気よ？
あなたのは、すごいおちんちんなのだから……」

「ふふっ、お互い汗だくになってしまったわね。
でも、もう少しこのままくっついていてもいい？」

「汗でベタついて、肌がくっつくこの感じ……
なんだか安心する……」

「あ……キスは待ってっ。
私、今あなたのをお口でっ……んっん！？」

「ん……ちゅ、れろっ、はぁ……ちゅっ、んんっ、
ちうぅっ、ちゅっ、んんっ、ちゅぅ……」

「はぁ……あなたのキス……ずるい……
軽くされただけでも、腰が抜けたみたいになって……」

「あまりそういうことされると、
本気でお部屋に閉じ込めてしまいたくなる……」

「……くす、冗談よ。私は、あなたに出会うまで、
男性のことでヤキモチを妬くような女じゃなかった」

「でも、これが今の私」

「他の女の子にすぐ嫉妬して、不安になって、
どうしようもないぐらい、あなたが好き……」

「それを変えることはできないから、
できれば、あなたに……
こんな私を好きになってほしい……」

「今の、ありのままの私を見てほしい」

「……心から、あなたを愛しているわ」